

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月7日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03371

研究課題名(和文) 労働市場の近代化と人的資本形成に関する比較史的研究

研究課題名(英文) Comparative studies for labour market development and human capital formation

## 研究代表者

齊藤 健太郎 (SAITO, Kentaro)

京都産業大学・経済学部・教授

研究者番号：10387988

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19-20世紀初頭のイギリスと日本において、人的資本や労働供給の変化を通じて、近代化に対応する標準的な労働力が形成されつつあったことを明らかにした。イギリスに関しては、19世紀前半に識字能力の低下がみられた一方で読む能力が上昇する可能性があったこと、19世紀後半には学校教育によって技能職への基礎的知識が普及したことが示された。技能にグレードを導入し職場内外の評価に対応する労働組合もあった。日本に関しては、労働供給の年給化や近接化などの労働市場の変化、国民教育を通じた児童の労働力としての訓練、さらに徒弟教育の近代化が試みられたことなどを示した。これらは計4回の国際学会等で報告された。

## 研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、19-20世紀の人的資本と労働供給の変化を、「労働力の標準化」という概念を用いて論じた点である。これは社会の幅広い階層における基本的な知識や技能の普及と労働供給を論じることで、「労働過程論争」が論じたような熟練の消滅と残存の中間に新たな説明項を与え、労働力の質の変化、労働と近代化に関して新しい理解を与えるものとなる。また、本研究が教育史学との連携によって得た青少年期を広くカバーする学校教育の歴史的形成過程に関する知見は、近年に欧米で提起されている「技術と教育の競争」とも関連しており、今日の各国の教育や労働の現状の理解をたすけるものであり、その社会的意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：This research project explored, by using a concept of 'standardization of labour, on 'how human-capital and labour supply of Britain and Japan in the 19th to the early 20th century were modernized. As for the British cases, we revealed that in the nineteenth century fundamental knowledges needed in modern section of industries were given to children through elementary education while literacy rate tended to decline with up-ward possibility of reading abilities. Also in industrial sphere there can be pointed out collaboration on standardization of workers' skills between trade union and employers. As for the Japanese cases, we showed that the labour supply and the contract system changed in the soya-sauce industry around the early 20th century, and that the national education begun to train pupils for standardized labour. It was also shown that apprenticeship was modernized by specially organized training schools. These case-studies were discussed in four international conferences.

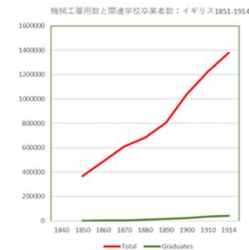
研究分野：経済史

キーワード：労働市場 人的資本 近代化 教育 イギリス 日本

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

19 世紀から 20 世紀初頭には各国で産業化が進行し、労働市場に供給される労働力の質・知識・技能が経済にとって重要となった。これは経済学においては人的資本として理論化されている。しかし、確かに 19 世紀には専門技術者の数は増えたが、技能労働者数の増加は、下図のようにこのような技術者の数だけで説明することはできない(赤=全機械工数、緑=専門教育経験者)。この時期においては、普通の労働者の人的資本が一定水準に達し、「標準的な労働力」が形成されたことが重要であり、その水準には読み・書き・算盤(3R)といった基礎教育が大きく影響する。しかし、これら標準的な労働者の知識・技能の形成は既存の研究では十分に論じられてこなかった。また、労働供給に関して、世帯は内部の労働の配分を通じて労働の利用を最適化しようとする労働供給を行うが、人的資本が変化すると、世帯の労働供給も変化する。近代化の過程では、労働配分には地域ごとに労働供給パターンに大きな相違が存在することが指摘されているが、そこで起きる労働移動についても研究状況は十分ではなかった。一方、職業における教育や訓練は、諸団体・国家による諸学校の創設などによって大きく変化することが重要である。そして、対象時期においては、イギリスと日本の双方で、「私的」な領域であった教育に、国家などの「公的」な制度が介入し始める。19 世紀の労働市場における制度の在り方は一様ではないにもかかわらず、その差異を明示的に取り上げた比較研究は少なかった。以上が研究開始当初の背景である。



注 Buchanan, R.A., Institutional Proliferation in the Engineering Profession, 1847-1914, *Economic History Review*, vol. 38(1985)  
Lee, C.H., *British regional employment statistics, 1841-1971*(1979)

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、上記の背景に対し、近代化の過程における労働力の質の変容を「標準化」として捉え、実証研究を通じて、労働供給の諸変化を示すことであり、以下の3点に整理できる。第1に、18世紀から20世紀初頭にかけて、労働者一般に期待される知識や技能がどのように変化したのかを検証し、彼らの知識や技能の到達度を数量的に示すことである。第2に、この多様な展開の中で学校・世帯・労働団体・企業などが上記のような「標準化」に対して果たした変化と機能を示すことである。第3に、教育と労働における制度的諸変化と上記との関連を近代のイギリスと日本に関して比較し、「労働市場の進化」として再検討することである。

### 3. 研究の方法

本研究は、人的資本形成と労働供給に関して、イギリスと日本における事例研究を行ない、それらを比較するために、資料を収集または拡充し、国際比較可能な社会科学の指標を選択・作成・分析することを研究計画の中心とする。諸学校、裁判所、センサス個票、労働組合、企業および政府文書などの資料を文書館で収集し、分析した。研究方法は、叙述的記録資料の解読と可能な場合は数値化およびデータベースの作成とその統計的処理などによる。

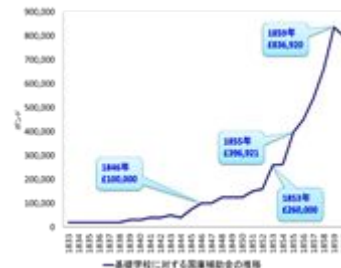
### 4. 研究成果

本研究は、イギリスと日本の双方の近代化過程を対象とする5名による共同研究であり、上記の研究背景・目的・方法を共有するものの、事例研究は多様である。以下では、イギリス、日本の順にそれぞれの成果をまとめ、最後に全体についてまとめる。

イギリス産業化はおよそ18世紀半ばからとされる「産業革命」に始まり、その変化は労働市場の変化そのものである。山本千映(研究分担者)は、これまで十分に利用されてこなかった犯罪者の記録を用いて、産業革命期イングランドにおける人々の識字能力の推移をより詳細に明らかにした。用いた史料は、スタッフォードシャーとベッドフォードシャーの州の四季裁判所の Calendars of Prisoners である。利用できる時期は、犯罪者の出生年で見るとスタッフォードシャーが1753年から1846年、ベッドフォードシャーは1766年から1858年であり、サンプル数は順に約12,000件、約7,000件である。二州の比較からは、(1)全般的な識字レベルはスタッフォードシャーで高い、(2)スタッフォードシャーでは識字能力の若干の低下が見られるのに対し、ベッドフォードシャーでは緩やかに上昇する、(3)出生コーホートで見た場合、前者では1810年代前半生まれまで緩やかに上昇し、その後は下降するのに対し、後者では全般的な上昇が見られる、(4)年齢プロファイルを見ると、前者では7-14歳の時点で7割近い児童が何らかの識字能力を持ち、30代以降緩やかに下降するが、後者では若年時の識字能力がかなり低く、20代後半まで上昇した後、30代後半以降緩やかに低下する、といった諸点が観察された。州レベルで観察すると、識字レベルは一様ではなく、産業革命期を通じた識字の獲得・喪失の方向性も異なっていたことが明らかになった。

三時真貴子(研究分担者)は'Who should take the responsibility to children's vocational training? - Education in Manchester Certificated Industrial School'において、マンチェスター認定実業学校における浮浪児の受入を論じ、これが国・市・地域ボランティアの協調により例外的に成功したことを示した。19世紀前半の専門教育組織としては、メカニクス・インスティテュートなどがあったが、世紀半ばには停滞していた。国家は補助金受給という形で関与し

て、基礎学校が 1833 年に設立されていたが、補助金が上昇するのは 19 世紀の半ば以降である（右図）。19 世紀後半の基礎学校での『技術教育』の実践例を調査した結果、技能教育 EW での特別科目「機械学 A・B」を受けた生徒は 3800 人であり、特に、バーミンガムの基礎学校での「機械学」受講者 2700 名というように、科目がグレードにより体系化され、さらに特別科目を教える基礎学校後学校により、実業教育が充実していたことがわかった。



一方で、このような基礎的な技術教育の動きに産業界が全く無反応であったわけではない。齊藤（研究代表者）が調査したバーミンガムの労働組合・バーミンガム真鍮工組合は、1910 年から労働者の技能をグレード化し、職階や賃金と細かく階層化することに成功した。これは労働組合と経営者が賃金交渉をする際に、技能訓練のために設立された「真鍮工学校」がその仲介をするために基準化されたものであるが、技能の標準化を労使が共同して行った例として G.D.H. コールも注目している。

日本の近代化期については、谷本雅之（研究分担者）が、19 世紀から 20 世紀初頭の野田の醤油醸造業における雇用労働の実態を、高梨兵左衛門家資料を用いて分析した。明治期の醤油醸造の活性化により労働需要が増大しており、日雇人から年給労働者が中心となる雇用形態に変化していた。一方で、労働供給源としては、労働移動は広域化したわけではなく、むしろ近接化していたことが明らかとなった。また、福島県耶麻郡慶徳村の寄留統計をもちいて、労働移動の性別・職種別の世帯内属性の特徴を分析し、10 代後半の独身男性移出が 1930 年代まで増えないことを見出した。

19 世紀後半に日本は、イギリスで開発された教育方法である、一斉教授法・学習法をアメリカ経由で導入した。梶井一暁（研究分担者）は、その背後にある教育変化を「余力学文」から「身を立てるの〔ママ〕財本」とした上で、国民が共通に獲得される基礎能力と教育経験を通じて、その制御に慣れることで、近代工業化社会において効率的な労働と生産を成立させるための人的資本となったと指摘する。そして、人的資本形成の場として機能しはじめた近代学校は、人材面において、知識や技能を授け、労働者を社会に送り出す役割を果たすだけでなく、精神面においても、「勤勉」や「勤労」あるいは「勉強」などの価値を強調する学校は、勤勉な労働者を形成するのに有利な装置となったといえる。

明治後期から昭和戦前期には、各業種の労働市場で市場統合が進んだが、齊藤は関東地方における大工の技能の標準化について、「徒弟学校」の卒業生に注目している。徒弟学校は、1890 年に東京で設立されて以来、全国各地につくられ、1921 年まで存続した。建築業において明治期以降に西洋から導入された技能を、より実際の領域で教育することを目指し、近世の徒弟制と大学教育との中間にある訓練機関として民間建設会社などに人材を送り込んでいた。

このように、本研究はイギリスと日本の双方において多様な事例研究を行った。イギリスについては、産業革命期の識字能力は州によって変化の方向性が異なること、19 世紀後半には基礎学校で標準化された技術教育が行われていたこと、真鍮工のように労使が協調して技能の標準化が行われた業種があったこと、日本については醤油醸造業において労働力の給源が時代とともに近接化し近場での労働力の調達が可能になったこと、学校教育において一斉教授法が定着していくこと、徒弟学校という形で大工の技能形成が行われたこと、など、これまで必ずしも詳細に論じられてこなかった基礎的事実が明らかにされた。今後の課題としては、これらの諸事実を踏まえた日英の包括的な比較が必要とされよう。そうした比較を通じて両者の異同を明示し、そうした差異がなぜ生じたのか、なぜ生じなかったのかといった観点から議論を展開させていくことが求められる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

Makiko SANTOKI, Management of and Local Network for Educating Vagrant Children: A Case Study on the Manchester Certificated Industrial Schools in the Late Nineteenth Century, *The East Asian Journal of British History*, 査読有, Vol.5, 2016, ページ 93-112.

梶井一暁, 「近代移行期における国民教育の確立と教育観の変化」, 『岡山大学大学院教育学研究科集録』, 163 巻, 査読あり, 2016, ページ:9-19

Kentaro SAITO, Taking account of counting in British history, Introduction, *History in British History*, Proceeding of the 7th Anglo-Japanese Conference of Historians, 査読有, 2016, ページ: 139-140

Chiaki YAMAMOTO and Manabu OZEKI, "Agricultural Surveys in Japan and England", K. Kondo ed., *History in British History*, Proceeding of the 7<sup>th</sup> Anglo-Japanese Conference of Historians, 査読有, 2016, ページ: 141-165

梶井一暁, The Development of the national Education System and the Change of Educational Outlook at the Turn of the 19-20<sup>th</sup> Centuries of Japan: the Formation of Human Capital Through School System, *The Proceedings of the Fourth Japan-China Teacher Education Conference*, 査読有, 2015.巻: vol.4 ページ: 143-152

〔学会発表〕(計 9 件)

Kentaro SAITO, 'Labour market development and skill-standardization in Modern Japan; Skilled workers in building industries and vocational training', the 18th World Economic History Congress, MIT, USA, August, 2018.

Chiaki Yamamoto, 'Male Breadwinner Households and Time Use of Women', the 18th World Economic History Congress, MIT, USA, August, 2018.

山本千映「経済史の役割」, 教育史学会第61回大会シンポジウム「近代学問における歴史研究の意義 政治史、経済史、科学史、そして教育史」, 於岡山大学、2017年10月7日

山本千映「産業革命とジェンダー：アレン＝ハンフリーズ論争の論点整理」, 政治経済学・経済史学会春季総合研究会「グローバル経済史にジェンダー視点を接続する」, 於東京大学、2017年6月24日

三時眞貴子・山本千映「19世紀前半のスタッフォードシャーにおける識字率 産業革命の影響と犯罪少年」, 比較教育社会史研究会春季例会、於大阪大学、2017年3月27日。

International Conference on Economic History, "Market Integration during the Modernization in East Asia", Keimyung University, Korea, 2017-02-20

三時眞貴子, 'Who should take responsibility to Children's vocational education?- Education in Manchester certificated industrial school', Anglo-Japanese Conference of Historians, 発表場所：大阪大学中之島センター(大阪府、大阪市), 2015-08-11

Kentaro SAITO, 'Labour market integration of skilled workers during "Second Industrial Revolution" in Britain', the 17th World Economic History Congress, Kyoto International, Conference Center, Kyoto, Japan, August, 2015.

Chiaki Yamamoto, 'Reading and Writing Skills during the Industrial Revolution: a case study through quarter sessions records', the 17th World Economic History Congress, Kyoto International, Conference Center, Kyoto, Japan, August, 2015.

Masayuki Tanimoto, 'Migration and occupational structure in the industrializing economy; trends and patterns of migration in early 20<sup>th</sup> century Japan', the 17th World Economic History Congress, Kyoto International, Conference Center, Kyoto, Japan, August, 2015.

〔図書〕(計 1 件)

谷本雅之, 慶應大学出版会, 「醤油醸造業における雇用と労働」, 井奥成彦・中西聡編『醤油醸造業と地域の工業化』, 総ページ数, ページ: 157-192, 2016

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

日英歴史家会議 Anglo Japanese Conference of Historians  
<https://ajchistorians.wixsite.com/ajc2015>

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名: 谷本 雅之

ローマ字氏名: (TANIMOTO, Masayuki)

所属研究機関名: 東京大学

部局名: 大学院経済学研究科

職名: 教授

研究者番号(8桁): 10197535

研究分担者氏名: 山本 千映

ローマ字氏名: (YAMAMOTO, Chiaki)

所属研究機関名: 大阪大学

部局名: 経済学研究科

職名: 教授

研究者番号(8桁): 10388415

研究分担者氏名：梶井 一暁  
ローマ字氏名：( KAJII, Kazuaki )  
所属研究機関名：岡山大学  
部局名：教育学研究科  
職名：准教授  
研究者番号(8桁): 60342094

研究分担者氏名：三時 眞貴子  
ローマ字氏名：( SANTOKI, Makiko )  
所属研究機関名：広島大学  
部局名：教育学研究科  
職名：准教授  
研究者番号(8桁): 90335711

(2)研究協力者  
なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。